

100年の時を、四万十川と共に・・・ = 四万十町上宮 =

清流通信読者の皆様、こんにちは。今回は、四万十川中流域の四万十町上宮から、松田三代松さん(97歳)についてお伝えします。



上宮沈下橋 と ねむの木



四万十町 上宮(じょうぐう)

四万十川の中流域まで来れば、川幅は徐々に広がり、川は大きな蛇行をはじめ。四万十川本流に架かる 22 の沈下橋のうち、上流から数えて 8 番目の“上宮橋”があるここは、四万十町上宮(じょうぐう)だ。昭和 32 年にこの橋が架かるまでは、上宮集落と対岸の北ノ川集落を結ぶ 3 カ所の渡し舟が運航されていたという。しかし、台風などでひとたび大水が出れば、川向こう左岸にある上宮地区は、水が引くまでのしばらくの間“陸の孤島”と化してしまう。それ故ここに、地域の人達が総出でかわり造った橋が完成したときは、盛大な落成式で、村を挙げての祝いをしたのだという。

“川は近いが、水は遠い”

ここ上宮には、小高い丘の上に二つの溜池がある。何の為の溜池か、当然水源であるのだろうか、川にこれほど近い土地に“何故の溜池”なのか、私は最初不思議に感じていた。また、橋のたもとには、四万十川から水を取るポンプも設置されている。貯水池にも水が不足する場合には、直接、四万十川から取水することもあるのだという。

そういえば、四万十川上流域の中土佐町大野見地区の堰のこと。大野見地区では、中世から堰による灌漑をし、農地を開墾してきた歴史がある。“川は近いが水は遠い”と言われたこの地域には、四万十川本流沿いに 12 カ所ある堰のうちの 6 カ所が集中し、人々が開拓、灌漑に費やした苦難の歴史が伺える。

大野見と同様に、ここも“川は近いが水は遠い”場所だったと推測するのだが、現在のの上宮地区は圃場整備によって豊かな水田が広がり、国営農地開発事業によりスプレー菊など栽培する“一大畑作団地”ができていて、水が遠かったことも今は昔の感がする。

地域の“生き字引”

梅雨の晴れ間に覗く太陽がまぶしい 7 月上旬に、この上宮沈下橋たもとにあるお住まいに、松田三代松さんを訪ねた。

大正 4 年生まれ、今年の 2 月で 97 歳になった松田さんの日課は、毎朝、新聞を 1 時間、“隅から隅まで読むこと”でスタートする。「新聞をまず読んで世の中で起こっていることに目を通します。そして、午前中の半日は畑仕事をやって、野菜や芋など作ります。以前は米を作ってもいたが、今はしていません。午後の時間は家にいて、たいい読書することが多いです。」

そう話されるご自宅脇の畑には、素人目に見ても明らかに次元の違う、見事な里芋やナスなどの野菜がすくすくと育っている。

晴耕雨読、悠々自適、半農半読・・・と、いろいろな表現はあるものの、晴れた日には田畑を耕し、雨の日には家にこもって読書をする、世間の風に煩わされることなく日々の生活を送る、今のそれは“理想の暮らし”のようにも映る。しかし、考えても見れば、二度の大戦を経験した松田さんの人生が、いつの時も穏やかであつたはずはないと、そこには想像が及ぶのだが。

7 人兄弟の長男として生まれ育った松田さん。その当時の日本の社会がそうしたように、多くのこども達は、子守りや家業の手伝いをしながら通学をした。「貧しくて学校へ通ったのは 6 年間だけでしたが、学校は楽しかった。算数と地理・歴史は、特に好きでした。」

学校を卒業した後、家業の農業を継ぐが、その傍ら、地域のためになるならばと、民生委員や農業委員、地域の会計役なども積極的に引き受けてきた。「なんでそんなことを今でも覚えているのか、昔、この上の溜池工事をしたときの費用とか、その時払った賃金とか、全部覚えちゃいます。」そう言って松田さんは、南海地震(S21年)後の溜池の補修に365万円かかったことや、四万十川から水を取るポンプの工事費用が445000円(S34年当時)だったことなどを、何も見ず、まるで昨日の出来事のようにスラスラ話してくれた。

勉強家の松田さんは、地域の歴史や出来事について“雑記帳”に綴っている。「字が下手やけん」と言いながら見せて下さったノートには、びっしりと達筆で、様々なことが事細かに書き込まれている。何年か前、旧大正町で町史を編纂したときには、編集委員として自らが知る地域の歴史を語って協力をした。また、地元の小学校に招かれて、こども達に地域についての話をするということもあるという。

「国のことがよくわかるから、新聞や雑誌はよく読む」という松田さんのお気に入り、15年以上もとり続ける“文藝春秋”。そういう松田さんのことをよく知る近所の人たちは、読み終えた雑誌などをいろいろ届けてくれるという。子・孫・ひ孫と4世代家族の松田家の“何でも知っているおじいちゃん”は、地域にとっても大切な人なのだろうと、そのお話を伺いながら、私は思うのだ。

四万十川と共に生きてきて

四万十川が目と鼻の先、こんな近くで百年の歳月を川と共に生きてきて、この川の変化には驚くべきものがあるのだろう。

「四万十川は、ここ10年くらいですら随分キレイになったと思います。以前は見苦しいくらいにビニールなどが川辺の木に引っかかっていたり、空き缶などのゴミが河原に捨てられていたのですが、ここ最近は何もほとんどなくなりました。それは多分、いろいろな人が気をつけるようになったからだと思います。けれども自分らがこどもの時には、四万十川の水をそのまますくって飲んだ、飲めた。今は絶対無理ですが。また昔、この下の川では、アユやらエビやらイダやら、すごい数の魚が捕れたが、今はそれも“夢のあと”です。」

「それよりも、昔と随分変わったことと言えば、毎年毎年、川で溺れるこどもがいるということです。私らが小さかった時分は、川が怖いと思ったことなど一度もなかったですよ。川は友達だった。多少の水が出たとしても、靴を頭にのせ川を泳いで渡ったものです。」

自然環境を変えたのは、人間。そして、川との関係を変えたのも、やはり人間だろう。けれども、何より一番変わってしまったのは、実は、人間そのものなのかもしれない。

ねむの木の咲く川辺

この時期、上宮沈下橋のたもとの其処此処に、ねむの木が紅色の花を咲かせる。このねむの木は、日本の本州・四国・九州や、中国南部・朝鮮半島などに自生する陽樹であり、荒れ地に最初に侵入する“パイオニア的樹木”と言われ、可憐な花には似合わず、強い植物であるようだ。夏、四万十川に沿って走れば、幻想的な紅色の花をつけたその高木を、あちこちに見つけることができる。

和名の“ねむの木”の由来は、夜になると葉が閉じる“就眠運動”からくるもので、その葉は夜になるとゆっくりと自分で閉じ、それがまるで眠るようなので『眠りの木』、そして次第に『ねむの木』に変化していったということだ。また、地方によって“ねんねの木”“眠りの木”“日暮らしの木”など、様々な呼び名があるようだが、眠りを意味するものがほとんどなので、ねむの木といえば“子守歌”を連想する人も多いと思う。

その子守唄、日本のものには二種類あって、親が子に歌う“寝かしつけ歌”と、子守りをするこども達の労働歌“守子唄”と言われるものがあることを、最近になって私は知った。幼い頃に聞いた“子守唄”が、何故か妙に寂しかった理由が、今にしてようやくわかった。けれども、よく聞けばその“守子唄”、寂しいだけでは決してなく、力強さや前向きなおおらかさも秘めていることにも、気が付く。こども達の小さな抵抗や願いが込められている、それはやはり“小さな労働歌”なのだ。

連綿と続く日常の中で、一世紀の時間の経過を見つめてきた。そこにはたくさんの苦労もあったと想像できる。小さな弟や妹の世話をしながら、“守子唄”を歌うこともあったのかもしれない。しかしそういうことは、今の松田さんの表情からは窺い知れない。

穏やかに流れる四万十川のようなその笑顔の中には、全てを見て、そして越えてきた、松田さん自身の歴史の1ページ1ページが、深く、深く、刻み込まれている。

(取材/記事: 矢野由美子)

